

平成二十四年度

第十二回全国中学生

「防火防災に関する」

作文コンクール入賞作品集

生活協同組合 全日本消防人共済会
財団法人 日本消防協会

熊本県

天草市立天草中学校 二年

古田 駿 作

災害から考えたこと

「見つかって良かった。」

消防団の父が言った。行方不明者の連絡が入ってきて、見つからなければ捜索に行く予定だったと話してくれた。これは最近の話だが、数年前にも同じようなことがあった。消防団に入っている父は何日も朝早くから、夜遅くまで行方不明者の捜索に出かけていた。家に帰ってくると、

「疲れた。」

というが、面倒だと文句を言ったことはなく、

「家族も親戚も大変な思いをしている。」

と話してくれた。

先日の阿蘇の大豪雨による災害では今の段階で、まだ二名の方が見つからない。父のように地域の消防団の方達が出動し、自分の家族のこのようなように心配し、探し続けているのだと思った。

消防団の方達は、それぞれ別に自分の仕事を持っているのに、地域で火事や災害があった時に、すぐに駆け付け、地域のために働いてくれている。僕たちの安全な生活を守るために、活動してくれる心強い存在だ。

新聞を読んで知ったことであるが、今、阿蘇には地域の消防団の方達でなく、全国の様々な場所からボランティアとしてやってきて、災害の後片付けを行ってくれている人達がいるそうだ。中には、「東北の震災で助けもらったので、お返しです。」

と、東北から熊本に駆け付けてくれた人もいたことだった。東北の震災もまだ傷跡が残っているのに、助け合いの精神には感動した。東北の震災の際、外国メディアが日本人の助け合いの精神をほめてくれたのを同じ日本人として嬉しく、誇りに感じたことを思い出した。

阿蘇の豪雨災害は、僕が住んでいる熊本県で起きた出来事だが、まだ僕には何も出来ない。僕に出来ることを見つけて、動きたい。僕の周りには消防団員の父や、僕のことを可愛いがってくれている地域のおじさんやおばさんがいる。僕を育ててくれている地域のために、将来僕も消防団員として役に立てるように自分を磨いていきたい。



お父さんの背中

「休め、気を付け。」

元気はつらつとした消防団員の声が響く。農業が盛んに行われる、小さな町の消防団だ。そんな小さな町の消防の副団長をしているのは、僕のお父さんだ。僕が生まれる前から、地区分団に所属していて、分団長をした後、副団長をしているのだ。

ある日、年末で、みんな忙がしそうに駆け回っている時だった。

その日は、家の一大イベント餅つきをしている時だった。杵と臼でつく昔ながらのやり方で父も汗を流していた。その時

「ウーウー建物火災が発生しました。」

防災無線が鳴った。そのとたんに、父が急いで家の中に入り、着がえてすぐにまた飛び出してきた。僕は、その素早さに感動した。父を初めて「かっこいい」と思った。

その日以来、日に日に、父の背中が、大きく、たくましく、かっこよく見えるようになった。

部屋に掛けてある団服。それがいつも、かっこよくりりしく見えるようになった。そのゴツゴツして、大きくて、重い団服こそが地域を守ってくれている印なんだと思えてくる。

今、天水町は、消防団をしてくださる人が少なくなってきたと聞いた。確かに火事や災害の現場では、自分の命もおびやかされる危険と隣り合わせだ。しかし、

「人の命を必死に守る」

ということとは、素晴らしいことだと思う。だからそこに、やりがいを感じるものなんだと思う。

今、中学二年生で、これから、どういう進路へ進むか悩んでいる所だ。いい高校、いい大学へ進んでいくのもいいかと思う。でも、お父さんのように、天水に残り、みかん農業をしながら、消防団に入るのも一つの道ではないかと思う。

人の命のために頑張ってくれている消防団の方々、
「いつも、ありがとうございます。」

